

野の味のひと

城山三郎

「大蔵省をやめて、はじめて郷里で演説会に立ったとき、もうだめだと思いましたね。後援会が集めてくれた聴衆が、わたしの話を聞いているうち、あちこちで居眠りをはじめましたからね」

新人の大平さんが気をとり直したのは、次の日、別の演説会場へ行ったところ、前日の会場にいたおばさん数人がきていて、「話はまずいけど、あんたの赤ん坊のような笑顔がとてもいいから、また聞きにきてやったよ。がんばりな」と、励ましてくれたからだ、という。

それを、大平さんは目がつぶれそうに笑いながら、いった。大蔵大臣のときであった。わかる、わかる、とわたしもうなずき、野の味のするおおらかなひとだ、と思った。

公式の場では、「アー」「ウー」の多い大平さんだが、対談のときなどは、反応も早く、論旨明快。無類の読書家にふさわしく、話は興行きが深く、また次々にひろがって、たのしいひとであった。

一橋出とはいえ、大平さんが傾倒されたのは、杉村広蔵博士の経済哲学であり、わたしもしばらく哲学青年だっただけに、対談の主題はそっちのけで、哲学談義にふけり、司会者に注意されたこともあった。

哲人らしく、恬淡であった。総裁、総理への声がかかりはじめた折、「本人にそのお気持は」ときくと、大平さんはとんでもないというように、部厚な手をはげしく振って、「とても、そんな気は……。わたしは、ここまですごくこれだけでも恵まれすぎだ、とと思っています」と、声を強めていわれた。口先だけでなく、本気でそう感じ

ておられる様子であった。

大平派内に、「うちの大將にその気がなくて困る」とのぼやきがある。と、そのあと、旧知の政治記者に教えられ、わたしはひとりうなずいたものであった。大平さんの口から、「困ったことだが、派閥の競争が自民党に活力を与えてきた」といつつぶやきを聞いたことがある。そうした政治力学をさめた目で認識しながら、大平さんは個人的心情を超えて、総理の道へとふみ入った。

大平さんとは、ゴルフ場でも一度お会いしたことがある。

重心が低く、大振りをしない。お尻に手拭をぶらさげて、これまた野の味のするゴルフ。アプローチは、グリーンのはるか手前からころがして寄せて行く。そして、パターは、いつも強目。詰めがしっかりしており、たいへんいいスコアであった。自称「焼酎ゴルフ」、うまくはないが、強い。ということであった。

この日は、ちょうどヨーロッパでの蔵相会議から十六時間かかって帰国された翌日のことであったが、時差ぼけなどまるで感じさせない逞しさ。頑健そのもののひとに思えたのだが……。

東京サミットが終ったあと、大平さんは、裏方の人々を築地の料亭に招いて、ねぎらわれた。たまたま、その夜、わたしは同じ料亭で、やはり大平さんと旧知の財界人と食事していたが、その財界人ともども、料亭の廊下で大平さんと出会った。

大平さんは赤ん坊のような笑顔になった。「これはこれは、知らん人ばかりですなア」と、たのしそうに冗談をいい、「いつか知らん人の会をやりましょう」ということで別れた。ついにその会を持つことはなかったのだが。

(作家)